

正信念佛偈 20

■天親讚①

天親菩薩造論說
帰命無碍光如來

天親菩薩『論』(淨土論)を造りて説かく、
無碍光如來に帰命したてまつる。

現代語訳

天親菩薩は『淨土論』を著して、「無碍光如來に帰依したてまつる」と述べられた。

☆天親菩薩（5世紀頃）



- 七高僧の第二祖
- ガンダーラ地方プルシャプラ出身
(現在のパキスタン・ペシャワール地方)
- 兄、無著の勧めにより部派仏教から大乗仏教に転向
- 「千部の論主」と呼ばれ、淨土真宗では特に『淨土論』が重要な聖教
- 親鸞聖人の「親」の一字は、天親菩薩から取られている。

※「鸞」は第三祖・曇鸞大師から

紀元前330年頃にアレクサンدرス大王の遠征軍がペルシャを越え北インドまで制圧し、ギリシャ文化を持ち込んだ。その後も紀元前2世紀にはバクトリア王国のギリシャ人の支配を受けるなど、西方文化の流入は続いた。つまりガンダーラの仏教美術とは、仏教とギリシャ美術が融合した結果である。

『淨土論』願生偈

世尊、われ一心に尽十方無礙光如來に帰命したて
まつりて、安樂国に生ぜんと願ず。

→ 天親菩薩の信心表白

○阿弥陀如來をなぜ「光」で表現するのか

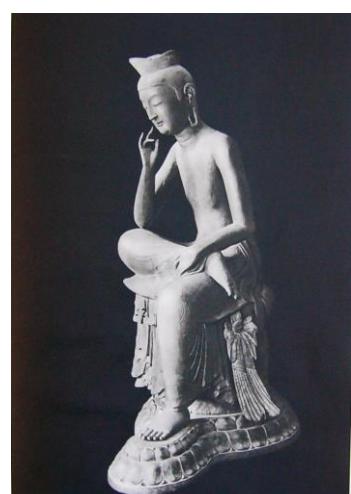
第十二願（光明無量の願）

わたししが佛になるとき、光明に限りがあって、数限りない佛がたの國々を照らさないようなら、わたしは決してさとりを開きません。

→ 十方を照らす佛となっている



弥勒菩薩交脚坐像（ガンダーラ）



弥勒菩薩半跏思惟像（広隆寺）

令和4年 5月14日 信行寺仏教入門講座

親鸞聖人『唯信鈔文意』

光明とは智慧なりとするべしとなり。

⇒ 仏教において我々の煩惱を無明の闇と表現し、ブッダの悟りの智慧が光明で表現される。

『仮説阿弥陀経』

舍利弗、なんぢが意においていかん。かの仏をなんがゆゑぞ阿弥陀と号する。舍利弗、かの仏の光明無量にして、十方の国を照らすに障礙するところなし。このゆゑに号して阿弥陀とす。また舍利弗、かの仏の寿命およびその人民〔の寿命〕も無量無邊阿僧祇劫なり。ゆゑに阿弥陀と名づく。

無碍光 ⇒ さわりなく私に届けられる

外障 … 外的な障害物を障げとしない

内障 … 私の煩惱を障げとしない

慶信房からの質問

念佛を申している人びとの中に、「南無阿弥陀仏」と称える合間に「無碍光如来」と称えている人もいます。これを聞いてある人が申すには、「南無阿弥陀仏と称えての上に、さらに帰命尽十方無碍光如来と称えることは遠慮すべきことです」というのですが、この状況はどうしたものでしょうか。

親鸞聖人の回答

「南無阿弥陀仏」と称えて、さらに「無碍光仏」と申すのは悪いということこそ、大変な誤りであります。「帰命」は「南無」を翻訳したものです。「無碍光仏」というのは光であり、智慧であります。この智慧はまさしく阿弥陀仏です。阿弥陀仏の御はたらきをご存知でないから、それをはっきりとお知らせ下さろうとして、世親菩薩（天親）が御ちからを尽くして「帰命尽十方無碍光如来」とお示し下さったのです。

無明長夜の灯炬なり 智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり 罪障おもしとなげかざれ（正像末和讃）

阿弥陀如来の本願は、煩惱によって迷う衆生を照らす灯火であるから、智慧の眼が暗いと悲しむことはない。阿弥陀如来の本願は、生死の大海上での救いの船であり筏であるから、証りへの障りとなる悪業が深いと嘆くことはない。

たとえ暗闇であっても、一筋の光があればそれを頼りに歩んでいくことができる。阿弥陀如来の光とは、自分の命がどこに向かっているのかわからない、あたかも闇のなかを歩んでいる人生に差し込んでくる言葉である。その言葉こそ「南無（まかせよ）阿弥陀仏（われに）」であり、私を浄土へと導いていく。